6 音　楽　科

川口万里・福田秀範

1　音楽科が育むもの

文部省学習指導要領の音楽科の目標と本校の研究テーマ「自立に向かう子どもたち」を受けて，音楽科では，「生涯にわたって音楽に親しむ態度や意欲の育成」に重点を置いて，取り組みを行ってきている。特に「生涯にわたって」という視点を重要ととらえている。そこに，学校における音楽教育の必要性を見出すとともに，その意義を追究していく授業を行っていきたいと考える。すなわち，学校での音楽活動が「なんて音楽っていいんだろう。」と子どもたちが感じる土台となるような感動体験となり，それが，生涯にわたって音楽を楽しんでいける確かなものとなって，子どもたちの内面に培われていくような音楽科の授業をめざしていきたい。

2　音楽科でめざす「自立に向かう子ども」の姿

音楽科では「自立」を「自分から楽しく音楽に親しんでいる」姿と大きくとらえ，めざす子ども像を次のように考えた。生涯にわたって音楽に親しむ姿は「楽しさ」の実感と「感動」の共有が重要と考えて，設定している。

○　楽しく歌ったり，演奏したりする子ども
（自分で歌を歌うことや，楽器を演奏することに喜びを感じる子ども）

○　楽しく自分自身で音楽をつくる子ども
（自分自身で，音楽や音楽表現をつくる楽しさがわかる子ども）

○　楽しく様々な音楽をきく子ども
（音や音楽に耳を傾けることを楽しむ子ども）

○　音楽科で学習したことをもとに，生活の中で進んで音楽とかかわる子ども
（音楽活動を自分から楽しむ子ども）

◎　ともに音楽活動をすることによって，感動を共有できる子ども
（人とのかかわりから，音楽活動の楽しさを感じる子ども）

3　サブテーマ「人やものとかかわることを大切にして」とのかかわり

「音を楽しむ」という音楽科ならではの活動が，子どもたちにとって非常に大切である。例えば「音楽はメッセージ」とよく言われるように，音楽のよさは，言葉では表せないような自分の伝えたいものを音に託し，音楽によって相手に伝えられるということにある。それにはまず，音を大切にするという姿勢を身につけることが出発点となるだろう。ここから自分と音とのかかわりを深めていきたい。さらに音楽には，心を一つにして，集団で音楽表現を工夫することにより，一人では為し得ない大きな表現を創り上げることができるよさがある。集団で活動する中で，音楽を媒介にした人と人とのかかわりが生まれ，自己の存在の大切さに気づいたり，表現にかかわる責任感や連帯感，表現し終えた時の達成感，充実感などをともに味わうことができるようにしていきたい。

このように音楽活動の楽しさが実感できたり，感動をともにすることができる子どもを育んでいくには，本校のサブテーマ「人やもの（音）とかかわることを大切にした」授業づくりが大きくかかわっていると考えた。そこで，「楽しさが実感できる」「感動をともにできる」という２面に焦点を当て，具体的な授業づくりに迫っていく。

4　「自立に向かう子ども」を育む授業の具現化

(1)　楽しさが実感できる授業

様々な活動の場面で，子どもたちが「楽しかった」と感じることができる授業にしていきたい。子どもたちが，授業後まだやりたいという気持ちが残っていたり，自分の力が発揮できたり，自分の考えていたとおりの表現ができたり，ふりかえる過程で，次への課題がどんどんわいてくる状況などが挙げられる。

これらの具現化に向けた支援の方法として，次の点を挙げてみた。

・　教材は子どもに愛好されるもので，しかも心情を揺り動かすような魅力のあるものを選択する。また，子どもの希望による曲も適宜取り上げるような柔軟性ももつ。

・　学習過程は教師主導ではなく，音楽に向かっていく子どもの気持ちを大切にし，それに沿った展開づくりを心がけていく。

・　音楽に興味をもち，楽しむために必要な基礎的な能力（歌唱や器楽の表現技能など）最低必要なことが，全ての子どもに身につくようにする。

(2)　感動をともにできる授業

音楽のよさは，何といっても人やものとのかかわりを通して，感動を共有できるという点である。みんなで協力して音楽活動を行う過程では，自分の工夫が生かされたり，友だちの表現を鑑賞しそのよさを感じたりして，お互いがめあてを共有し，表現を追究し，深めていくことが感動を味わえるきっかけとなる。そのために必要なこととして，次のことを大切にしていく。

・　教材との出会い，人との出会いから生まれる感動体験を大切に，そこから自分の表現への意欲が高まり，追究の見通しがもてるようにする。

・　学習のめあてを自分で決め，それに向かってじっくり取り組む時間や場を設定して，楽しく学習できるようにする。

・　子どもの音楽へのイメージを大切にし，それを自分で決めた様々な表現活動を通して，自己実現できるような場を設定し，達成への満足感がもてるようにしていく。

・　自分で決めた表現活動などがより実現可能になる場として，同じ思いの子ども同士でのグループ学習を積極的に取り入れ，友だちと協力して表現することによって得られる感動を共有できるようにしていく。

5　総合的な学習とのかかわり

音楽科では，これまでに本校の総合的な学習との関連を図った授業を研究実践している。「人間」では，「平和の歌」の学習と関連して，実際に平和公園で自分の思いを込めて歌を歌う機会を得た。アメリカの小学校の児童と低学年の児童との音楽交流も現在進行中である。「環境」では，行事とも関連して５年「山の学習のテーマ」４年「海の学習のテーマ」２年「元宇品探検隊のテーマ」１年「えんこう川探検隊のテーマ」を子どもたちとともに作詞・作曲する授業や自然体験から得た様々な音を身近な音素材で表現し，身近な人々に発表するという授業を行った。「自分タイム」では，６年生の沖縄旅の学習で，実際に三線等の琉球楽器にかかわった体験をもとに自分の研究をまとめるといった子どもが出てくるなど，音楽科の「琉球の音楽」の学習での経験を生かした追究活動をする子どもが増えてきた。このように，子どもたちの直接体験から出発して行われる総合的な学習において，そこから得た感動体験を表現する活動は重要になってくる。特に音楽科としてかかわっていける部分も大いに考えられるので，今後も研究実践を積み重ねていく。

6　成果と課題

(1)　低学年

「楽しさの実感」を重視し，遊びの要素を組み込んだり，家庭では触れられないたくさんの楽器に学校で触れてみる機会をつくったりした。また，たくさんの歌を歌って，それが愛唱歌となって子どもたちの生活に生かされていくように取り組んだ。

・遊びの要素を組み込んだ実践は，日本や世界の遊び歌を歌ったり，自分の知っている遊び歌を紹介し合ったりするなど，子どもたちが歌いながら体を動かし，実際に遊びながら，人とかかわって楽しく活動できた。今後も，世界中に視野を広げ，より多くの遊び歌を見つけられるよう題材開発に取り組んでいきたい。

・たくさんの楽器に触れてみる機会としては，既成の楽器にとらわれず，空き缶やペットボトルなど身の回りの素材から興味・関心を広げていく支援を行った。その成果が，音づくりの際に，自分の必要な音を，様々な音素材から見つけている姿に見られた。

・愛唱歌を増やす試みとして，授業の始めに歌集の曲や全校で取り組む今月の歌を歌う活動に取り組んだ。様々なジャンルの曲を歌うことで，教科書の曲だけでは味わえない楽しい時間として定着している。今後も継続していきたい。

(2)　中学年

・４年生が，東雲中学校２・３年生の選択音楽の授業に招待していただくという機会に恵まれた。小学生に喜んでもらおうと，アニメの合奏や，ストンプ・ダンスの楽しいパフォーマンスなど，盛りだくさんのプログラムを用意してコンサートを開いてくれた。最後に演奏されたゴスペルの熱唱はたいへん感動的で，改めて子どもたちはお兄さんお姉さんたちを尊敬したようであった。今後，このような交流がさかんになっていくことを願っている。

・中学年では，リコーダーを中心に基礎的な力をしっかりつけていくことに重点をおき，反復練習を取り入れたり，各自が自主的に練習に取り組めるような習慣化を図ったりした。学級活動でリコーダーや歌の練習に取り組むことにより，一人ひとりの力が伸びた。また，互いに演奏を聴き合う場をふやすことによって，練習に真剣に取り組むようになり，音楽の楽しみ方の質が高まってきた。また，表現活動に自信を持つ子もふえてきた。

(3)　高学年

・総合的な音楽活動をロングスパーンで設定することができた。複高「管楽器に挑戦！」「ストンプをつくろう」「マイテープをつくろう」６年「世界に一つのマイソング」５年「低音と和音」などの題材を工夫することができた。自分の力を発揮しようと，興味を持って一生けん命取り組む姿が見られた。

・宿泊学習（総合的な学習）と関連させた６年「琉球の音楽」５年「折り鶴・ヒロシマのある国で」などの学習を実施したことによって，興味・関心の拡がりが見られた。

・演奏家を学校に招き，鑑賞の授業としてゲストティーチャーによる６年『アリランに親しもう』『日本の楽器に親しもう』を実施できた。集中して鑑賞することができ，演奏者や楽器とのかかわりを深めていくことができた。

(4)　全体

毎月の音楽朝会では，全校児童，教職員が集って今月の歌を歌うだけでなく，教師による合唱やリコーダー演奏，バンド演奏，ブラスバンドクラブの演奏，さらに教育実習期間中には，実習生による混声合唱などいろいろな人の演奏とかかわる場を設け，子どもたちの興味・関心を広げていく試みを行った。音楽朝会で得られた感動をもとに，さらに授業やクラスで歌い深める場面が見られたのが大きな成果であった。今後は，子どもたちが演奏を発表し，それを聞き合う場を増やしていきたい。